上野博士没後90年

三重大成岡教授 功績語る

近代農業土木学の祖

ハチ公の飼い主として世に知られる上野英三郎博士は、水田の耕地整理や用排水路の整備などの技術を体系化した「近代農業土木学」の第一人者だった。

日本では一九〇〇（明治三三）年に耕地整理法が施行され、細かく分散した水田を効率的に集約し、用排水路や農道の整備する大規模な耕地整理が進められた。技術が未熟だった当時、上野博士は国内唯一の農業土木学の研究者として学問を体系化し、技術者の育成に力を注いだという。

上野英三郎博士（東京大学大学院農地環境工学研究室所蔵）

上野博士の業績に詳しい三重大大学院生物資源学研究科の成岡市教授（農業土木学）は、富国強兵が唱えられた時代に「耕地整理と技術者の育成を進めなければいけない当時、技術や仕組みを確立させた功績は大きい」と話す。農業土木学会は毎年、新分野の発展に貢献した組織と団体を対象に、上野博士の名前を冠した「上野賞」を贈っている。

成岡教授によると、現在の三重大生物資源学部、大学院生物資源学研究科の前身となる三重高等農林学校が二一（大正十）年に開校した際、上野博士が津市出身地だった縁で、日本初の農業土木学科が設けられた。

上野博士の功績を語る三重大の成岡市教授＝津市の三重大で

出身の津に国内初の学科

現在、この学部の卒業生は三重県庁や愛知県庁など官庁に就職するケースが多く、成岡教授は「卒業生は公共事業に対し、責任感を持って仕事に取り組んでいる。その点で、上野博士の精神をつないでいるのではないか」と話す。

ハチ公飼い主

忠犬ハチ公の飼い主として知られる津市久居元町出身の上野英三郎博士（一八七二～一九二五年）が亡くなってから、二十一日で九十年。農業土木学者として東京帝国大（現東京大）で教授を務める傍ら、一人の愛犬家としてハチをかわいがり、涙を誘う愛のストーリーを後世に残した。節目に合わせ、上野博士の人物像をあらためて見つめる。

（滝田健司、堀内敦子、河郷丈史）

上野英三郎博士とハチ公

上野博士は1924年1月、秋田犬のハチを飼い始め、ハチは、上野博士の送り迎えのため渋谷駅や東京帝国大へ通った。上野博士が25年5月21日に脳出血で急死した以降も、ハチは35年3月8日に亡くなるまで、10年近く渋谷駅に通い続けた。この様子が新聞で報じられて有名になり、34年にはハチの銅像が渋谷駅前に建てられた。上野博士とハチが並んだ銅像が津市の近鉄久居駅前と東京大農学部キャンパス内に建っているほか、ハチの出生地の秋田県のJR大館駅前にもハチの銅像がある。

「素晴らしい人知ってほしい」

銅像を建てる会の多田さん

時にはハチと一杯楽しむ

「上野博士は相当な犬好きだった。ハチもその愛情に応えてくれたのでしょう」。「上野英三郎博士とハチの銅像を建てる会」元代表の多田滋郎さん(六二)＝津市久居新町＝は、その人柄をしのんだ。

一九二四年一月、秋田犬を飼いたがっていた上野博士のために、教え子が生後間もない秋田犬の雄を贈った。夜行列車で自宅に届いた子犬がハチ。上野博士は「風邪をひかないように」と、家の中に招き入れたという。

「上野英三郎博士とハチ公」の銅像と建てる会元代表・多田滋郎さん＝津市久居新町の緑の風公園で

ハチとの生活は、上野博士が大学で急逝するまでのわずか一年半だったが、その絆は何よりも強かった。多田さんによると、上野博士は自らのベッドの下にハチの寝床を設け、常に寝食を共にした。毎日の散歩も欠かさず、わが子のようにかわいがった。

上野博士が渋谷駅を利用するとき、ハチは必ず駅まで送り迎えに来た。「仕事帰りには渋谷駅近くの焼き鳥屋で、博士がハチに焼き鳥を分け与えながら、一杯飲む光景もよく見られたそうです」

多田さんら住民有志は二〇一二年、近鉄久居駅東出口前の緑の風公園に上野博士とハチ公の銅像を建てた。多田さんはこれからも上野博士の人物像に光を当てるため、「忠犬ハチ公と上野英三郎博士を顕彰する会」の立ち上げを考えている。

「銅像をライトアップするなどして、素晴らしい人物が津市にいたことを多くの人に知ってほしい」

中日（19面）

注）著作権法により、二次複写及びネットワーク上への複製を禁止します。